

少女戦記 番外編

槍姫千本突き



濠門長恭

目次

- 一 .. 囚われの姉妹
- 二 .. 幕屋での破瓜 三
- 三 .. 縄と蠟の凌辱
- 四 .. 唐辛子の軟膏
- 五 .. 素裸の稽古台
- 六 .. 肉槍の処刑場
- 後書き

二…幕屋での破瓜

「ほほう、これは……」

首実検の場に引き出された菊姫を見て、相馬高成たかなりはにやりとした。誇示するように突き出された乳房をじっくりと眺める。じゅうぶんに丸みをおびていながら、少女の風情を残している膨らみ。つんと上向いた薄桃色の乳首。

袴からこぼれるふくらはぎへ、高成の視線が移る。武芸で鍛えられて引き締まった下半身。

「風雅な花の活け方であるな」

高成は、菊姫を捕らえた部将をほめた。二十余名の損害を出した失態は咎めない。

「まだ蕾とおもっていたが、なかなかどうして。七分咲きといったところか」

羞恥と憎悪で朱に染まった菊姫の顔を見下ろして、好色そうに唇を舐める高成。

「倅にはもったいない。儂が手折ってやろうぞ」

「むぐーっ、ぐぐ……」

磔に架けられるか首を斬られるか。死ぬ覚悟はできていたが、身体を穢されるとはおもっていなかった。

「なんじゃ？　いいたいことがあるのか？」

「むぐぐぐ……」

「竹轡をはずしてやれ」

「ですが……このように気の強い女子おなご、舌を噛むやもしれません」
命じられた近習がためらった。

「自害したければ、させてやるわ。ただし、そのときは……」

高成は菊姫にむかって嗤いかけた。

「おまえの妹に、儂の相手をしてもらうぞ。固い蕾をこじ開けるのも一興」

（卑怯な……！）

竹轡がはずされても、妹を人質にとられていては相手を罵ることさえはばかられた。

「ふむ。異論はなさそうじゃな。儂にたつぷり可愛がられたいな」
あらんかぎりの憎悪をこめて、兄を殺し父の領国を奪い取った仇敵を睨みつけたが、通じるはずもなかった。

いや、通じたのか。菊姫は縛られたままで、裸馬の背を跨がせられた。

甲冑の軍勢に埋もれていた菊姫の姿が、遠目にもはっきりと晒された。

「戦っているときは鬼女かと思えたが、どうして。別嬪じゃねえか」

「顔もだが、あのおっぱい。ちよこつと揉ませてくれねえかな」

「姫さんよう。男を殺すのに槍なんざ、いらねえんだぜ」

聞こえよがしの、雑兵どもの野次。

「こ、このような……」

抗議をしかけて、そこで言葉を呑んだ。いえば、いつそうの辱めを受けるやも知れぬ。自分だけなら、それを覚悟で存分になじつてもくれよう。舌を嚙んで果ててもみせる。けれど、妹までがこのような目にあわされたなら……

たとえ自分は恥辱にまみれようとも、父のほかにはただひとりの肉親となった妹だけは護り抜いてみせる。前手に縛された身を騎馬武者に抱かれて鞍上にある妹の姿をちらと見た瞬間、菊姫は悲壮な覚悟を定めたのだった。

その日の行軍が終わるまで、屈辱の縄目を馬上に晒さねばならな

かった。我慢の限界に達して下の用を訴えると縛めを解かれたが、そのかわり、衆人環視の中で尻をからげて小川にしゃがむという屈辱がつけ加わった。

仇敵に乙女の操を踏みにじられることをおもえば、下賤の者どもに隠し所を見られるくらい、たいしたことではない。そう自分に言い聞かせはしたものの。いざとなると、ひと滴しずくさえも出なかつた。脂汗を流し、ついには我が手で下腹を揉んで、ようやく欲求を身体に認めさせたのだつた。

（あれこそが、最大の試練だつたのではないかしら？）

夜も更けて。縛められたまま、宿営地の奥に張り巡らされた幕屋の中で、毛氈に引き据えられて。陵辱の時を待たされながら、ふと

菊姫はおもった。

おのれの意志で醜態を晒すわけではない。仇敵に肉体を弄ばれる悔しさを耐え忍んでいれば、夜は明ける。そう自分に言い聞かせて、菊姫は未知への恐怖を克服しようとしていた。

やがて――突き出た腹を鎧下に包んだ高成が、菊姫の前に立った。「そう怖がらずともよい。おとなしくしておれば、極楽を味わわせてやるぞ」

菊姫の背後にまわり、縄尻をすいと引くと、手妻のように縄がほどけた。

ほうつと菊姫は息を吐いた。痺れた指先で衣服をととのえようとした。が、その前に押し倒された。

「二度手間をかけさせるな」

押し倒され、乳房を揉みしだかれる。

(痛い……)

苦痛に息が詰まった。

袴の紐がほどかれる。

「ひゃっ……」

ぞろりと内腿を撫でられて、くすぐったいような疼きがはしった。

「槍つかいの姫も、乗馬は苦手か」

袴の荒い生地に擦られて、内腿は赤く腫れていた。そこを撫でら

れるのは不快とばかりもいききれない。が……

「いやっ……！」

隠し所を、小水の出るところではないどこかを指でこじられて、菊姫は悲鳴をあげた。

「辛抱せい。すぐに気持ち良くなる」

指が、ますます深く菊姫をえぐる。

「あ……痛い」

眉根を寄せて、菊姫は苦痛とおぞましさに耐えた。

「どうにも潤いが足りぬ。生娘なれば無理もないが……」

ぺつと唾を吐く音。同時に、生ぬるい感触を菊姫は股間に感じた。

蠢く指が、その感触を奥へ塗りこめてくる。

「い、いや。そのようなところを……」

相手を突きつけようとした、そのとき。ぐいと両脚が割り広げら

れた。

「いやっ……恥ずかしい！」

菊姫は両手で顔をおおった。

つぎの瞬間。

「痛いっ……！」

食いしばった歯のあいだから悲鳴がほとばしった。

なにをされたか理解できぬ歳ではない。初めは痛くても、だんだんに心地よくなると耳にしたこともある。

（でも……それが、これだなんて）

この苦痛が羽化登仙の心地につながっているなんて、信じられなかった。

高成は、そんな菊姫の心中には無頓着に。突き挿れたあとは我武者羅に荒腰を使い、短い呻きとともにおのれの欲望を菊姫の中へ吐き出したのだった。

翌早朝に、ふたたび菊姫は半裸で後ろ手に縛られて馬上に晒された。股ずれを悪化させぬためと称して袴を許されず、左右にはだけた小袖の裾は太腿のほとんどを露出させていた。だけではなく――高成は『茶筒』と形容されるほどの巨根の持ち主だった。そんな男に貫かれた菊姫の秘所からは出血がつづいていた。白い内腿に伝い落ちる鮮血までも、人目に晒さねばならなかった。

軍勢は中食ちゅうじきを使わずに行軍をつづけて、昼下がりには居城へ帰着

した。

甲冑姿の高成を出迎えたのは留守を預かっていた相馬高継。凱旋を迎えるにはふさわしからぬ仏頂面だった。

弱肉強食の乱世、面従腹背は世の習い。裏切られるほうが迂闊――と、父のようには割り切れぬ。

そんな高継であってみれば、見世物同然に引き回されている菊姫を見て、黙ってはいられなかった。

「今は敵といえど、ひとたびは我と仲を言い交わした娘。このような無体な仕打ち、あまりでございましょう」

「馬鹿め！」

それが、高成の答えだった。

「このような娘、もはやなんの価値もないわい。おまえには、もつとふさわしい嫁を見つけてやる」